



# 第一回大会に寄せて

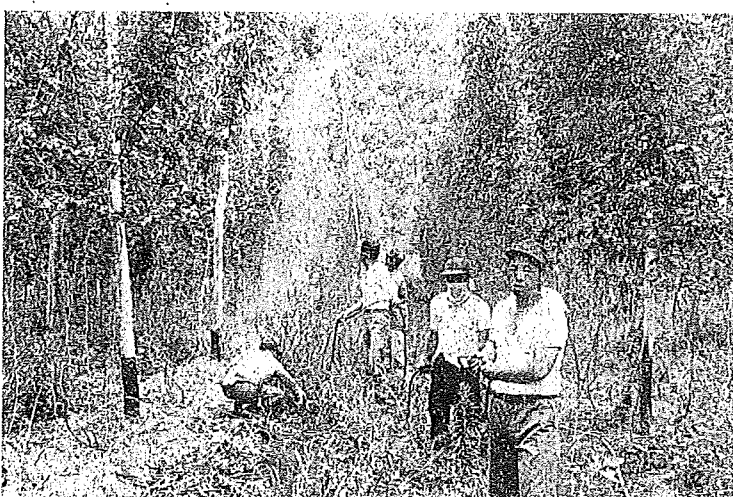
会長 中村 律

No. 20  
 発行所  
 社会福祉法人  
 山形県手をつなぐ親の会  
 事務局  
 山形市旅籠町  
 1丁目10番30号  
 山形県社会福祉会館内  
 TEL 山形 6572  
 印刷所  
 K.K. 誠文堂印刷所

最近、国の精薄福祉対策は可成献立が出そろってきた感じがする。その中でなにをとりあげるかを考える段階にきている。ところが、それを地方自治体が消化しきれないために絵にかいた餅におわっているのがかなしい現実である。たとえば、あらゆる集会で真剣に話し合われている課題の一つに、幼児教育の問題がある。人間の脳の組織は三才までに大人の八五〇位出来る、性格もつくられる。満六才までに集団訓練をした場合は、IQはのびるというアメリカの研究例も報告されているという。だから、幼児の教育が大切なのである。それには、養護学校をつくりその中に幼稚部を設けて早期訓練することが考えられる。この養護学校の設置方を十数年来校長会や特殊教育研究会共に陳情をくりかえしているがまだ実現しない。さらに残念

なことは、国(文部省)では「養護学校をつくりなさい」といつて予算を用意して受入れをまわっているのにその予算が毎年消化されずに残ってしまう。いまや、全国で精薄養護学校のないところは十六県だけで山形県もその中に含まれている。これは知育偏重の教育観がカビくさく根を張って、人を育てるといふ遅い教育の理想がくもっているのではないだろうかとかえ考えたくなる。かつて天下の三大教育県とよばれた名声は再び戻らないのだろうか。  
 東京教育大学の西谷三四郎教授は精薄児の教育は社会に役立つ人間に育てることではない。必ずしも社会に役立つばかりでもない、本人の生き甲斐をのびしてやることである。そして、生き甲斐とは、自分のもっている力を出しきって生きていくことである。と説いている。私は、この

こどもたちに働らくことに生き甲斐をもたせてやりたい。作業はその能力にに応じて考えてやればよい。その生産物などは問題ではない。下手にこどもたちをかばうよりも、雑草のように遅く育てていきたい。何か仕事ができ、安住できる場所をつくってやりたい。これが多くの人の願いでもあった。それがコロニーであり、その核として栄光園が誕生したのである。いま、五十人のこどもたちは仕事をとおして精一杯いきいきと生活をしている。この間訪れたときは、ホップの収穫期であった。部落の人達に混って甲斐々々しく作業しているこども達の姿をみるといじらしくなってきた。こども達と一緒にやって作業している指導員のかくれた努力も有難い。温く面倒をみてくれている部落の人たちには心の中で手を合わせたい気持ちであった。



農事に励む栄光園の園生(男子)

いた迫力が感じられてうれしかった。栄光園は根づいたという感じがひしひしとした。  
 それにつけても、このしあわせを五十名だけにどめたくない。もつと沢山のこども達に生き甲斐をもたせたい。そのためには、是非早急に拡張することがのぞましい。更には重度のこども達のために更生施設をつくり、コロニーへの路を切り開いていきたいものである。隣の秋田県では、五〇〇人収容の県立コロニーがすでに着工されて、今年の四月

から一〇〇人の入所が開始されている。宮城県でも総合福祉委員会が設けられて、毎月一回コロニー建設の計画をねっているという。福島県でも早くから検討をはじめている。コロニー建設の要望はこの県でも高まっている。先の全国大会でもこの問題が大きく取上げられ、国に対してコロニー法の早期設定をつよく要望することになった。厚生省でも、総合福祉施設（コロニー）は重度のものを対象に、最小、県単位ぐらいの規模という構想で検討中である。幸いにして、山形県でも総合的福

### その後の栄光園

——社会復帰をめざして

——すくすく伸びる園生——

昨年三月県民の期待を集め、米沢市万世町梓山に建設された「授産施設栄光園」は、同年四月二十三日多くの祝福と賛辞のなか盛大な竣工式が挙行され、つづいて五月一日待望の第一回入園者二十名を迎えて以来一年五か月を経過しました。現在五十名の園生が十五名の職員に見守られながら社会復帰をめざして、いっしょうけんめい授産の作業にとりくんでおります。

入園したころは、名前を呼ばれても返事もできず食堂にもひとり入らず、ただ部屋の隅でじいっと目を

祉施設の必要性をつよく考えて、その実現を具体的に検討しはじめていくところである。

こういうときに、全会員が意志を結集して、これを強力にバックアップすることが最も大事である。栄光園の拡張と、県立総合福祉施設の早期実現を中心課題とするこの大会の意義は大きいといわねばならない。

これを機会に、今後毎年県内各地で大会をもち、福祉向上のためにますます強力に運動を展開したいと思う。会員諸氏の奮起を切に望んでやまない。

むいていた園生もいましたが、一年あまりすぎたいまでは、その子にも何人かの親しい友だちができ「栄光園を卒業したら工場に勤めるんだ」とまいにち瞳を輝かせながら仕事に励んでいます。その他の園生についても概略を述べるなら生活面・情緒面・作業面で素晴らしく改善されたと信じております。これらの成長は、本人の努力は勿論のことですが、家族の協力、地域社会の協力の賜であると関係者一同感謝しております。

しかし、この間、集団生活にどうしても適応できず、職員の懸命の努力にもかかわらず、遂に退園したものの、また病気のため集団生活が不適當であると、医師のすすめで退園したのも数名おります。

A君は五月二十日第二回の入園生

として迎えられました。九月ごろから、てんかんの発作がはげしく精神科医の治療をうけましたが好転せず、家庭療養中突然の死におそれました。栄光園初のかなしい出来ごとでした。

それでも社会復帰可能と思われるB君、C君、D君、E子さん、H君は作業面だけいいうなら成人の八十%位の生産をあげられるようになり、Iさんは低IQ者ですが、家事に關しては、一応社会に通用するまでに伸び、数々の明るい希望がもたれ



熱心にミシンを踏む栄光園の園生（女子）

ております。

いま園生たちは、朝八時半から午後四時半まで懸命に働き続けており八月二十一日からは部落農家とのホップ共同作業がはじまり、組合の人達と一緒に喜々として働き見劣りしない仕事ぶりです。

栄光園では次の五つの点を取り上げ実践しております。

- 1、健康な体づくり
- 2、基本的生活習慣の形成
- 3、作業能力の向上と技術の開発
- 4、豊かな人間形成
- 5、施設と地域社会の交流

特に私どもは園生に対し「こつこつと働いて金をとる逞しい人間」に成長させることを目標に、そのために健康な体づくり。基本的生活習慣の形成。相手から好感をもたれるいろいろなマナーの修得等々指導しておりますし、園生はそれに応えようと努力しております。一部には栄光園は園生を働かせるだけじゃないかという批判もありますが、先に述べた基本的な考えを理解いただけたら現状をおわかり願えると信じています。

生活指導は、職業訓練の中で十分指導が出来るかと考

えまた余暇指導や情操面の指導は指導員を中心として、ボランティアの組織化をはかって実践しております作業能力の向上、作業に対する自信は、本人の情緒を安定させますしそのことが次の勤労意欲を高める大きな原動力になります。

施設整備関係としては、当初管理収容棟と第一作業棟だけで発足しましたが、県補助や「あゆみの箱」等の補助を主体に約五百万円で第二作業棟、鶏舎、豚舎を新築し、また社会福祉法人清水基金の補助二八五万円で温室を建設、更に自転車振興会、県、共同募金等の補助五一三万円です。第三作業棟、物干場を十月末の竣工を目ざして工事をすすめております

以上その後の栄光園を紹介しましたが、関係機関や県民の指導と援助を得ながら残された問題を一つ一つ解決し、心の通った施設にしあげたいと考えています。(栄光園だより)

### 親たちの願い

一、軽い者は、社会自立

・ 自分のことは、自分でできるよ  
う。

・ 特殊教育や施設での指導をゆきわたらせ、社会の一員として、職業人として、立派に役立つ人に育てたい。

・ 快く迎え入れる職場をゆきわた

らせ、これを支える法的措置の確立をねがう。

二、重い者には温い保護

・ 医療と教育を兼ね備えた専門の施設をゆきわたらせる。

・ 家庭にある者にも指導や援助の手がとどくこと。

・ 生産的な生活の中で生き甲斐を味わえるような授産施設の設置が一日も早く実現をみることに。

・ 扶養手当や福祉年金など経済保障をゆきわたらせる。

三、親なき後の保障の確立

・ 親なき後も安心して生活できるように愛情と経済の保障のための施策を確立し、温かい地域社会を築き上げたい。

四、発生予防と早期対策

・ 生れた後の子どもを大切にすることはいうまでもないが、精薄児の生れないための予防の確立不幸にして発生した場合の早期対策の確立。

### 私のねがい

その一

私は八才の精薄児を持つ母親です。今日までのいろいろな苦労を書いてみたいと思います。昭和三十八年男の児が仮死状態で生まれ、その場で注射を五、六本打ち、酸素吸入を三日間しました。産声をあげたの

は一週間位過ぎてからでした。その後歩く時期になっても歩くことができませんでした。そのころ私たちは横浜に住んでおりましたので近くの医院、横浜医大病院、東京慶応病院といろいろ行って見ました。どこの

病院も診断はおなじでなかなか良くならず、歩きはじめたのは三才でした。だが耳は聞えても言葉が出ず、現在でも言葉を発する事ができません。

同じ年令の子どもがカバンを持って学校へ通っているのを見るたび自分の子ども普通に育っていれば二年生になっている筈なのと思えば涙がでてきます。今は山形のろう学校に週二回通い月に一回上山病院に行っております。養護学校へ入れていただくようお願いしております。入学させていただくようになりましてもひとりで着物の着替、入浴ができませんので宿舎に入ることができません。毎日通学するよりほかありません。それもひとりで汽車の乗り降りもできないので、私が付いていくようになりまして、私も親としての役目と思っております。でも昨年から手をつなぐ親の会ができて新庄最上学園での親子講習会に二日間行ったりいろいろな会に出席させていただく度に、同じ苦労を持つ者同志が話し合えることがせめて私の私的なことであります。近くに施設がないの

で困っております。一日も早く近くに私たちの子どもがお世話になることのできる施設がつけられることを願っています。(母親)

その二

早いもので特殊教育を担当してから十年になりました。しかし、いつも心に残ることは、就職のできなかつた卒業生のことです。十年の間約百余名の卒業生を送りましたが、現在もお、家庭保護にしている者九名、施設に収容されている者四名、未就職者が十三名もある現状であります。これは、精神障害が重いために、わずか三か年という現在の中学校の教育では、十分に成長発達(社会適応の)を助長することができないからだと思います。こんなとき、いつも、あと一年や二年の時間があればとしみじみと考えさせられます。しかし、制度は制度で厳しいものです。私たち教師は涙とともに杉の戸をあげねばなりません。もし、ここに養護学校高等部があれば、あるいは、障害者のための授産所でもあれば残された生徒も救われるのにと思ふ次第であります。この問題については、かつて、いままも、要望は関係機関にしていることでしょうか、なかなか実現は難かしいのでしょうか。一人の人間を救うことによって、社会は数倍にも増

して明るくなるのにと、つい、ぐちをこぼしてしまいます。かつて、山形市に授産所のあったところ、K君は約一年お世話になりました。そして立派に社会に巣立ってゆきました。この一か年の訓育によって人間に、真の生命が躍動するということは、なんとすばらしいことではありませんか。

(特殊学級担当教師)

その三

山形県には現在精薄児、者施設が七つあり、約五百名が生活している。ここでは毎日、着脱、洗面、排泄、食事等、ごく身辺のことを学んでいる者、学校教育を受けている者、作業をしている者、と学ぶ範囲は異るが、どの人も社会によりよく適応していくことができるようにとがんばっている。

Aちゃんはパンツをはけるようになったね。

Bちゃんは三つまで教えられるようになった。

C君は作業をあきずにできるようになった。

と今までできなかったことができるようになった喜びを、子供、親、そして職員が共に持つのである。この子供等は放っておかれては伸びない。毎日の訓練により少しずつ伸びるのだ。施設に入所できた子供は、指導員や保母、教員の下で力あるか

ぎり伸びていくことができる。しかし、それすらできない在宅精薄児、者が何と多いことか。県内の精薄児者は三万余といわれている。すると八四%がみすみす芽をつまれる状態におかれていることになる。残念というよりいかりがでてくる。親はもっとそうだろう。子供の年令が低く、施設に在る間は安心だ。でも十八才になったら、自分がいなくなったら、と親の苦しみははてないようである。経済的に家庭復帰をさせられては困る家庭、子供の状態からそれをさせることができない。幸い就職しても何らかの理由で失敗する。精薄児、者が社会にはいるということとは容易でない。この子供たちの足下で常に助長してくれる専門的な人と施設は欠くことのできないものである。好きで精薄になったのでもないし、産んだのでもない。何らかの障害があったのだ。子供の幸せと親が死後まで考えなくてもよいように多数のコロナー建設を望んでいる。

(保母)

支部だより

寒河江市手をつなぐ親の会では、青木会長を先頭に次のような請願書を寒河江市議会へ提出し強力にその実現方を進めております。

「小中学校の特殊学級の諸条件整

備に関しては、精薄児童生徒の幸福を願う御当局の暖かい御配慮によって良好なる状態にあることを衷心より感謝申し上げます。

さて普通学校卒業生徒の九十%が上級学校に進み、社会人として巣立つ現況にありながら、知恵遅れの子どもたちは、中学校の特殊学級を卒業してから、未だ一般社会に馴れず職業的技能・能力も十分開発されないまま就職しなければならぬ状況にあり、普通の子どもに及ばざる知能と生活能力をもって完全に一般社会に馴染ませることは正に至難なるものがあります。ためにある者は転々と職をかえ、ある者は家庭に逆戻りする特殊学級卒業者の未来は暗澹たるものがあります。

精薄児童生徒も地上に生を享けた同じ人間として、社会復帰を願うのが自然の情であります。特にその親たち、近親者の願いは誠に切なるものがあります。

中学校の特殊学級だけで、社会復帰の技能養成は不十分であり、是非その対策と施設の必要がせまられるものであります。ここに二、三年制度の精薄児のための授産所の設置を強くお願い申し上げます。

このことは寒河江地区だけの問題ではなく県下共通の課題であります。各地区の盛上りを期待します。

あとがき

私たち親の会が経営する「授産施設栄光園」は多くの方々の暖かいご支援により竣工をみる事ができました。

収容されている子どもたちの生々した姿をみると、このような環境こそが子どもの持つ能力を伸ばしてくれる所だと、つくづく考えさせられて、多くの方々の方々の善意が、更に強く感じられます。

特に自転車振興会からは、当初一、三〇四万円の多額の助成をいただきましたが、次に第三作業場(兼体育館)の建設には三〇〇万円の助成をいただき「栄光園だより」にありませうに十月末をめざして竣工を急いでおります。

そしてただいまは五十名の定員を更に五十名増し、百名が収容できるための第二期工事を計画中です。自転車振興会に広域配分として、また多額の助成をお願いして申請中であります。

私たちの念願が叶い、百名という多くの子どもたちが活躍する栄光園の実現を切に望んでいます。

